

しょうなんしんどうかんれんいせき

湘南新道関連遺跡

(平塚市No.188:大会原遺跡

平塚市No.189:坪ノ内遺跡

平塚市No.191:六ノ域遺跡)

調査期間

20000701～20051228

※断続的に実施

所在地

平塚市真土・四ノ宮地内

時代

縄文

弥生～古墳

奈良・平安

中世・近世



作成日:20070807

概要

調査は、県土整備部平塚土木事務所による都市計画道路3・3・6号湘南新道街路整備事業に伴う事前調査として、平成12年度から継続して行われている。

湘南新道関連遺跡は、大会原遺跡(No.188)・坪ノ内遺跡(No.189)・六ノ域遺跡(No.191)の開発事業地内にかかる地区の総称で、相模川下流域の右岸に位置します。

遺跡の周辺一帯は、相模国府(こくふ)域と考えられており、遺跡はその北東端に所在します(写真上)。

遺跡内で最古の遺物となるのは、縄文時代中期の土器片



▲ 上空から見た遺跡付近

で、少数が砂層上面より出土しています。遺跡の東端では古墳時代初頭に位置づけられる方形周溝墓が整然と検出され、中世後半には70基以上となる土壇(どこう:お墓)が存在しています。その墓域内には、中世のものとしては大変珍しい、1基の鍋被り葬(なべかぶりそう)も発見されています。

奈良～平安時代は、遺跡の西半を中心に、重複密集しながら夥(おびただ)しい数の竪穴住居が検出されています。また、南西では掘立柱建物が多く存在しています。

北西及び中央付近では谷地形となり、溝や井戸など、水に関する遺構が多く存在します。

東半では廂(ひさし)の付される大型掘立柱建物や竪穴住居の他、大型の鍛冶工房など鍛冶関係遺構が発見されています。

廂の付される大型掘立柱建物は坪ノ内遺跡と六ノ域遺跡で見つかり、広大な距離を画して並立する大規模な南北棟となっています。建物の外側には、ある一時期、掘立柱塀(ほったてばしらへい)が廻っていたことが想定され、廂の付される建物では現在のところ相模国最大で、国庁の脇殿(わきでん)とも考えられます(写真中)。

大型の鍛冶工房はその規模や作業内容からも国衙(こくが)の官営工房(かんえいこうぼう)とみられ、過去の調査も含めると、大規模な3棟が並列するかの状況となっています(写真下)。

近年まで、国の中心となる国庁(こくちょう)の建物は発見されておらず、併せて曹司(ぞうし)などの内容も判然としない状況でありましたが、この発掘調査により、国府域の景観が少なからず理解できるようになってきました。



▲ 大型掘立柱建物(東脇殿)



▲ 大型鍛冶工房